



井戸

村はずれにある古井戸の中を覗いてみた。底は深く、かすかにハッカの香りがする。

小石を投げ入れてみた。

頭蓋骨が投げ返されてきた。

にわとりを投げ入れてみた。

空き缶が投げ返されてきた。

黒い未亡人を投げ入れてみた。

やがて地鳴りのような音がして、井戸の中から巨大なロケットが飛び出して、猛烈な勢いで空の彼方へ消えていった。

ミルクウェイの二人の老女

「この道せまいですね」といきなり自転車に乗ったおばあさんに声をかけられた。

おばあさんはミルクウェイの端をよろよろゆっくりとペダルをこいでいく。週末にミルク雨がまとめて降ることを、おばあさんは知らなかったらしい。星のミルクで真っ白にぬれた髪を束ねて、よろよろゆっくり自転車を木星めがけてこいで行った。

その一方で、別の老女は背負ったリュックサックにポメラニアンを入れたまま、傘を差し無言で星々の上をすたすた歩いていく。小犬はリュックの中から頭を出して流星群にとり囲まれると、不安そうにキョロキョロしている。

ぼくが「パーン！」手を叩くと、小犬は驚いてリュックサックの中に隠れてしまった。

彗星駅のプラットホームで

誰もが思いつめた表情で、ぶつぶつ数をかぞえながらステップの練習をしている。
決して止まることのない超特急のホーキ星に飛び乗るにはタイミングが何より大事なんだ。

場内アナウンスの後すぐに、シャーッという音をたてて、すごい勢いで7009番ホームにホーキ星が飛び込んできた。

次々とスーツ姿の男たちがタイミングを見計らって、ホーキ星に飛び移る。みんなダンスする時みたいに軽やかなステップだ。

たったひとり、タイミング悪く乗り遅れた男がいて、彼は片足だけホーキ星の乗車口にひっかけたまま、逆さまの宙ぶらりん状態で、あっというまに遠い冥王星まで運ばれていった。

星くずカフェ

粉雪がふってきて夕空がますます暗くなった。寒くなってきたので、近所の星くずカフェへ行くことにしたんだ。店に近づくと、屋根の上に付いている看板のあかりが消えていた。

古びたドアを押して一步入ると、薄暗い店内に北極星コーヒーの香りが漂っていた。お客は一人もいない。マスターは暖炉のそばでうつらうつらしていた。

看板のあかりまたつけ忘れてるよ、とぼくが言ったらようやく気づいたらしく、マスターは照れくさそうに笑いながら壁のスイッチを押した。それでようやく屋根の上の北極星にあかりがついた。

魔法庁のブリキ・ロボット

魔法庁の二階の角にある休憩スペースで、七色星ネクターを飲みながらうたた寝していたら、年寄りのくたびれたブリキ・ロボットがやってきた。

独り言をつぶやきながら、窓にかかっていたロール・スクリーンを勝手に全部引き上げて、汚れたバッテリー・パックの中からおもむろに何か得体の知れない食べ物を取り出し、むしゃむしゃ食べ始めた。

食べている時もずっと外を見ながら、独り言をつぶやいている。ウルサイナ～と思っていたら突然ロボットの動きが止まり、静かになった。

ブリキ・ロボットの目には青々と波打つ月のさとうきび畑が映っていた。

多重怪盗アヤノサラ

星間バスの一番前の座席でうとうとしていたら、後ろからしつこく話しかけてくる奴がいる。
「貴君のアタマは私の物だ。それと貴君の体もな」

こいつは多重怪盗アヤノサラにちがいない。
ぼくが無視し続けていると、いつの間にかいなくなった。

この大泥棒は誰にでもすぐちょっかいを出し、油断した者の体をつぎつぎ奪い取っていくというやっかいな奴なんだ。

アヤノサラの立ち去った後には、軽い気持ちで返事をしたために顔を盗まれてうろたえている紳士や、胴体をなくしたことに気づかないまま散歩しているご婦人達がたくさん出てくる。

ぼくが星間バスの後部座席の方を振り返ると、乗客達の首から上がすべて盗み取られていた。
しかもそのことにまだ誰も気づいていないらしい。

ただひとり、運転手だけが緊張してすごい汗をかいている。

彼もまた両腕両足を盗み取られていたせいで、ハンドルを操ることもブレーキペダルを踏むことも出来ず、
バスはふらふらと暗黒の宇宙空間を疾走中。

星置き場

月の小屋には一年中クリスマス・ツリーが飾ってあるんだ。

そして、その地下室には秘密の星置き場がある。

ぼく達調査団のスペース・カヤックが古代門に到着した時、上空では星の群れがいっせいに泡立って騒ぎだした。

ホーキ星達の尾も交差して、激しさを増していく。

光沢を放ちながら、銀河鯨までがまとわりついてきた。

かなくずの焼けるねっとりした匂い。

案内人が突然態度を変えて、かばん語をしゃべりだした。

そのときホーキ星同士がぶつかった！

ソロバン気流

エーメ星行きの星間シャトルに乗っていたら、突然激しい横揺れがして危うく座席から放り出されそうになった。

乗務員のイカイルカが大慌てで機内アナウンスをする。「皆さま、当機はただいま大変激しいソロバン気流にのみ込まれました。無事にここを抜け出すためには皆さまのご協力が必要です！」

次の瞬間シャトルがまた激しく横揺れした。乗客の一人が叫んだ。「わかったから、早く問題を出せ！」

イカイルカは問題を出した。35たす25は？

別の乗客が答えた。60！

シャトルの揺れが一瞬おさまった。

機内もしーんと静まり返る。

うわっ、まただ！さっきよりも激しくシャトルが上下に揺れ始めた。

「7890ひく2456は？」大慌てでイカイルカが新しい問題を出した。

「・・・5434？」乗客の若い女性がおそろおそろ手を上げて答えた。

何事も無かったかのようにシャトルの揺れはぴったりと止んだ。

乗務員は汗を拭って弱々しく笑った。

その途端またシャトルが激しく揺れて上下逆さまになった。

「6390751かける0.3966214は？」

ぼくはすかさず答えた。「2534708.609！」

シャトルは上下また逆になって、ふつうに戻った。乗客達の間から「ほお〜っ」という感嘆の声が上がった。

「皆さま、ご協力ありがとうございました。もう少しでソロバン気流から抜け出すことが出来そうです！」

乗務員のイカイルカがうれしそうにそう言った。

乗客が全員歓声をあげた途端、最後の縦揺れが来たんだ。

「2かける3は？」とイカイルカ。

でもその顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

乗客達の間にもくすくす笑いが広がった。

そして誰かが勝ち誇ったように叫んだんだ。

「8！」

シャトルは狂ったようにぐるぐる、ぐるぐる・・・。

腐った星

その町はとても清潔で立派な建物が立ち並ぶおしゃれな雰囲気のところだった。

それなのに、町の通りには誰一人としていないんだ。

通りはおろか、町中がひっそりと静まり返って生き物の気配がまるでしない。

ふと丘の上を見ると、真っ白い発電所が建っていた。

星の腐ったようなにおいがそこから漏れていた。

ブーメラン

飛び魚のナマラ親方が雲に乗ってやってきた。

ぼくは大急ぎで雲にハシゴをかけると、親方のところまで登って行き、挨拶もそこそこに愛用のブーメランを手渡したんだ。

親方はしばらくのあいだそれを点検してから、微妙な角度を調整すると、これでいいんでないかい、と言った。

ためしにブーメランをカー杯投げたら、くるくるまわって戻ってきた。

そして勢い余ってぼくの頭上を飛び越え、ナマラ親方を真っ二つに切断してしまった。

よく見たらそれはブーメランではなくて、薄ら笑いを浮かべた三日月だったんだ。

「おかしら付きですぜ、ジャジェン・チャさん。」そいつは意地悪そうにそう言い放った。

皺のある会話

「旦那さま、今日のノ晩ご飯はなナににしまマしょうウウ？」

「そうだダなナナ、ユーレン。電気カレーかなナナ。」

「手間がかかカルルので、別なナものノにしてもらっッッてテもいいイイですか？」

「それレじゃあアア、怪物ピラフ」

「それレも材料が足りなナナナいのでダメメですス。」

「・・・猫舌パスタでデいいイよヨヨ。」

・・・これだから、月に皺が一本増えると困るんだ。会話が進まなくて。

星の赤ちゃん

星の赤ちゃんに音楽を教えることになった。

お母さん星はやる気満々で、どうぞ一人前の音楽家に育ててください、とぼくに頼むんだ。

でも、この赤ちゃんは全然ぼくの言うことを聞こうとしない。そわそわと落ち着かず、楽器を放り投げるわ、ぼくの指にかみつくわ、大声で泣き叫ぶわ、なかなか手こずらせてくれる。

そこで、ぼくは楽器の代わりにミサイルを星の赤ちゃんに与えてみた。

赤ちゃんはうれしそうにキャッキョと笑いながらいじりまわして、とうとうミサイルと一緒にPON!と爆発してしまったんだ。